

# 苗場山麓 ジオパーク

Vol.

11

## 振興協議会だより

〔発行日〕平成27年1月22日  
〔発行〕苗場山麓ジオパーク推進室  
〔お問い合わせ〕025-765-1600



日本百名山のひとつである苗場山。その懷に私たちが住む栄村と津南町があります。この苗場山麓に広がる大地の歴史は古く、この地がまだ日本海底にあった頃の堆積物が隆起し、またはその堆積物が崩落堆積した扇状地地形が基盤にあります。約30万年前に苗場火山が活動を始め、溶岩を流し、溶岩台地を形成しました。この溶岩台地は、その後の降雨や地震などで崩壊や侵食を受け、中津川が深い溪谷を刻むことで、その兩岸に溶岩台地の断面が露わになりました。河岸段丘の歴史は約40万年前に遡り、気候変動と大きく関わりながら中津川の侵食、再堆積、侵食を繰り返し日本唯一の段丘地形が生まれました。さらに、栄村天代に残された露頭には、約40万年前から日本列島で発生した大規模火山爆発に伴う火山灰が重なり合いながら保存されています。まさしく日本の火山活動を記録したタイムカプセルなのです。さらに、ユーラシア大陸東部にあるゴビ砂漠等から飛んできた塵が火山灰にパックされており、この塵を分析することでゴビ砂漠等の砂漠化の歴史を時間軸に沿って知ることができます。この苗場山麓は世界的な地質博物館なのです。

この地形環境を取り巻く気候は、約8,000年前を境に降雪量が増加し、現在の多雪化が生じました。それは日本海への対馬暖流の流れ込みと深く関わる自然現象です。この多雪化と苗場山などの高層湿原の形成に関わりがあることが、近年の調査で判明しました。苗場山麓の生態環境は多雪化の中で育まれ、気候変動に伴い南の植物の北端や北に繁茂する植物の南端、さらには太平洋側に育成する植物の最前線が複雑に絡み合う地点なのです。

私たち人類は、この苗場山麓に約3万前から住み始め、営々と今日まで活動を展開してきました。特に自然と1万年間共生した縄文文化においては、日本有数の遺跡群を形成するほど人口密度を持ち、その中で火焰型土器を創造しました。また中世においては、日本を二分する南北朝政権に関わる動乱の遺跡が苗場山麓に点在します。さらに江戸時代には鈴木牧之が秋山郷を探訪し、錦絵で当時の民俗と景観を書き残してくれました。そして、幕末には佐久間象山が苗場山麓の鉱物資源を探查した歴史があります。

ユネスコは、大地である“ジオ”、生態環境である“エコ”、そこに育まれた文化である“カルチャー”を「地域資産」と捉え、その保全活動と地域振興を推し進めています。

私たちは、持続可能な地域づくりの根幹に「自然環境と文化財」を据え、地域住民が「郷土愛」と「誇り」を体感する保全活動を始めるのです。その活動の場が＜苗場山麓ジオパーク＞であり、そこに21世紀型観光の本質が秘められています。

この輝きある「地域資産」を皆さんで磨き、その光が世界に放たれるよう、さらなる一步を皆さんと歩み出しましょう！

## 地域振興とジオパーク

苗場山麓ジオパークが認定され、ようやく本当のスタートラインに立ったと考えるべきです。ジオパークは、第一義的に「郷土教育＝郷土愛の育成」がありますが、今一方として「地域振興＝活性化」があり、これらが両翼となり、持続ある未来の地域策定の基盤となります。

ここでは「地域振興」という視点で、ジオパークを眺望してみましょう。

持続ある山村社会を作り上げるためには、林業や農業の基盤とリンクする資源利用が求められています。そのなかで潜在的な地域資源を「地域資産」と捉え直し、保全し、利活用しようとするジオパーク事業が推進

され、全国で 35 カ所が展開してきました。このたび苗場山麓ジオパークは 36 カ所目として仲間入りが認められました。

平成 26 年 12 月 27 日に「まち・ひと・しごと創生法」（平成 26 年法律第 136 号）が閣議決定されました。その中に「観光地域づくり、ローカル版クールジャパンの推進」が謳われています。そこには「複数の都道府県にまたがって、テーマ性・ストーリー性を持った一連の魅力ある観光地を、交通アクセスも含めてネットワーク化し、外国人旅行者の滞在日数に見合った“広域観光周遊ルート”を形成するとされています。

現在、雪国観光圏（新潟県・長野県・群馬県）の雪国文化WG（ワーキンググループ）では、自然環境を背景とした雪国文化を議論し、形作る作業を始めています。この基本的な考え方は、実はジオパークの理念である大地（ジオ）＋生態環境（エコ）としての自然環境と文化（カルチャー）の構造体理念が母体にあります。したがって、現在進行している雪国観光圏事業と苗場山麓ジオパークが重なり協調することで、強固な「テーマ性・ストーリー性を持った一連の魅力ある観光地」の素地ができあがり、さらに国の指導を得て変革するチャンスなのです。

また、関係府省庁が連携し「歴史まちづくり、国立公園・ジオパーク等の美しい自然、豊かな農山村、魅力ある食文化」に光を当て、観光資源の磨き上げの推進を国指導で進めることも謳われています。

このように地域の潜在的資源を保全整備すること、自律的で持続可能な観光地域づくりへの第一歩を歩むことが、ジオパークを基盤とした地域活性化モデルを検討する扉を開くことなのです。

これからは観光のプロである観光協会や商工会の出番です。世界でここだけの“オンリーワン”に誇りを持ち、将来を担う若人たちと夢を語り合う必要があります。それが持続可能な新しい苗場山麓運営戦略に乗り出すスタートなのでしょう。



## 苗場山麓ジオパークのロゴマーク決定！



12 月 1 日の振興協議会総会において、苗場山麓ジオパークのロゴが発表となりました。

上から、山頂が平らな苗場山と雪の結晶、緑は大地、赤は火山（溶岩）、そしてこれらの重なりで河岸段丘を表しています。河岸段丘の下には縄文が描かれ、縄文文化を示し、全体の形は縄文土器を表現しています。

苗場山麓の特徴が一目でわかる素敵なロゴマークです。

# 苗場山麓ジオパークのジオサイト

57 の見どころを随時紹介していきます

## 穴藤の川原(古型マンモス臼歯化石出土地)



所在地 津南町穴藤 種別 地質

穴藤の川原では、約 115 万年前に榛名山付近でおこった噴火の火山噴出物である上越火山灰(SK030)が見られます。堇青石(※)を含む火山灰層が見られます。そして、この火山灰層より上の泥炭層から、古型マンモスの左顎臼歯化石が出土しました。

古型マンモスはマンモス(ケナガマンモス)の先祖にあたるとされ、日本には 120 万年前頃、中国大陆から渡ってきたと考えられていて、70 万年前まで生息していたとされています。化石などから、大きさは高さ 4 m くらいであったと推測されます。

古型マンモスの化石は日本全国で 27 例しか発見されておらず、穴藤で発見された化石はその中の 1 つで、とても貴重な資料です。

この化石は平成 25 年 3 月 30 日に津南町指定文化財(天然記念物:化石)に登録されています。



古型マンモス臼歯化石

※堇青石(きんせいせき)・・・主に青色やスミレ色をしている鉱物。多色性がある。

## 石器として利用された岩の露頭



所在地 栄村中野 種別 地質

約 150 万年前～100 万年前、関田山脈周辺で始まった火山活動により、毛無山の噴出物が古信濃川に流れ込みました。これらの溶岩の中には、無斑晶ガラス質安山岩と呼ばれる黒く光る岩石が含まれ、一部は志久見川沿岸で露頭として確認することができます。その岩石は、旧石器時代、縄文時代に、加工しやすく刃物として使用するのに非常に鋭利になることから石材として多く利用されていました。この志久見川沿岸にそれらを使用していた人々が暮らしていた、いくつかの遺跡が形成されています。

無斑晶ガラス質安山岩は、志久見川沿いの中野の露頭や長瀬の川原で見ることができます。旧石器時代の加用中条 A 遺跡は、この安山岩を使った石器製作遺跡です。さらに、今から 15,000 年前の縄文時代草創期の遺跡である横倉遺跡からは、無斑晶ガラス質安山岩製の石槍が 10 数本まわって出土しています。

この岩石は、現在でも爪石として石の愛好家に珍重されています。



無斑晶ガラス質安山岩の原石と石器

※地質学の学説は複数あり、現在も研究が続いています。そして、本地域の調査研究がこれからも行われる必要があります。

## 日本各地のジオパークをご紹介します！

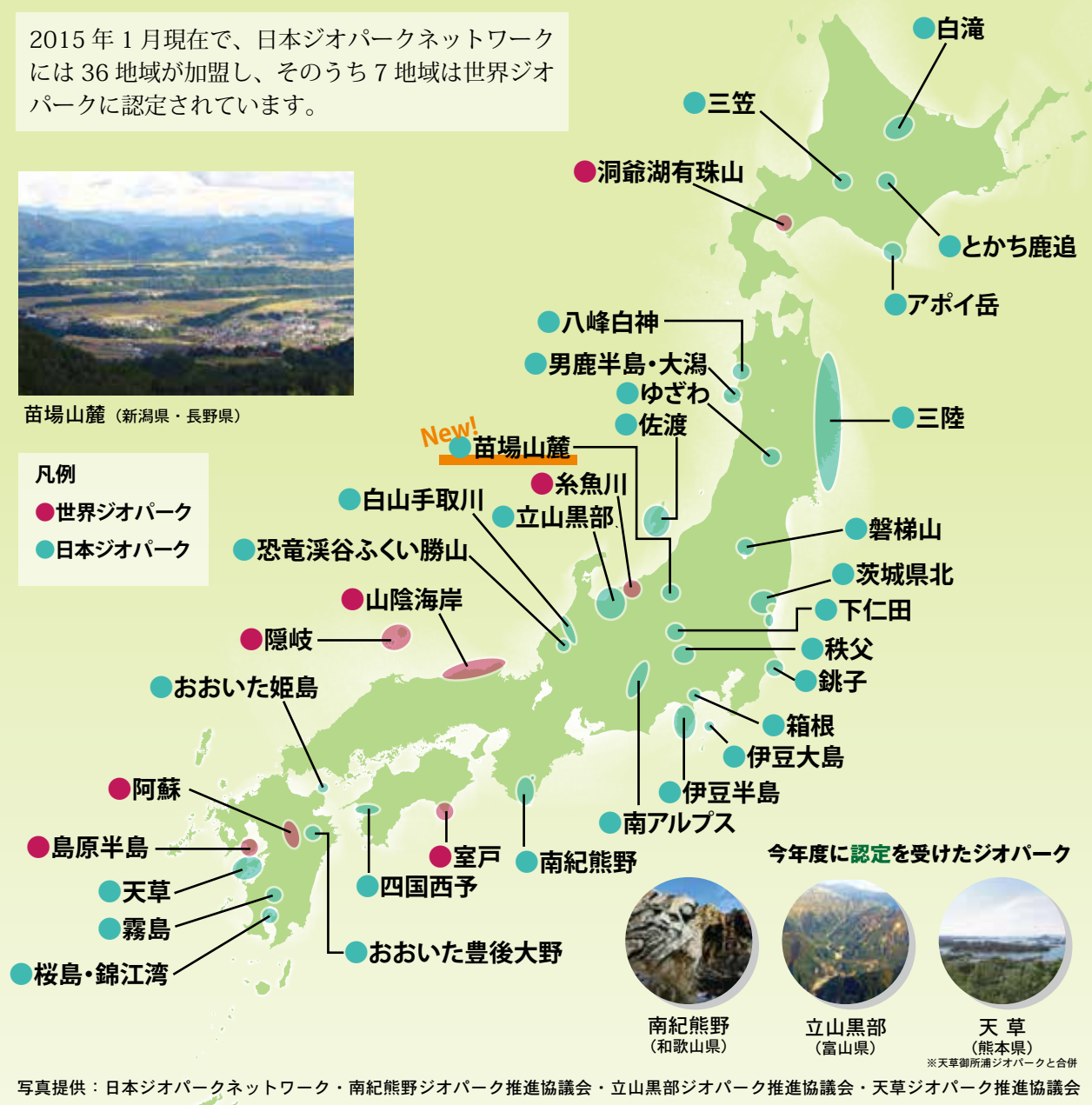
2015年1月現在で、日本ジオパークネットワークには36地域が加盟し、そのうち7地域は世界ジオパークに認定されています。



苗場山麓（新潟県・長野県）

### 凡例

- 世界ジオパーク
- 日本ジオパーク



## 苗場山麓ジオパーク専用のお問い合わせ窓口が開設されました。

グループ、企業などのジオパークの説明、勉強会にも伺います。  
その他、ジオパークに関することはお気軽にお問い合わせください。



ジオパーク振興協議会事務局  
ジオパーク推進室



**025-765-1600**

## 今後のスケジュール

平成 27 年 1 月 21 日 ジオパークガイド養成講座 第 2 期 ②

「ジオパークを取り込んだ地域づくり」 18:30 ~ なじょもん研修室

平成 27 年 3 月末 第 1 期ジオパークガイド認定試験